

日本語における「経験者(二)ハ～ガ～」構文・ 「～ハ～ガ/ヲ～タイ」の願望表現

—ブルガリア語の与格「mi」 / 「mi se」タイプ文の観点から—

Mila Maneva (Agora Sofia)
mila_m_bg@yahoo.com

1. はじめに

日本語の「～ハ～ガ～」構文は、学習者にとって習得が難しいと言われる。「ハ」のような主題を表わす助詞をもたない言語が多く、「ハ」で表される場合も、格助詞「ガ」で表される場合も、その要素は主語としてとらえることが可能で、実際も主語として理解されがちであるため、この構文の性質を理解することは容易ではない。本稿で論じる「経験者(二)ハ～ガ～」構文も、格助詞「ニ」の省略可能なものが多いため、学習者にとって、他の「～ハ～ガ～」構文と同様、習得が困難なようである。

しかし、「経験者」を「ニ格」で表す「私(に)はその所が不思議に感じられた」、「私(に)はこの問題が難しい」のような「経験者(二)ハ～ガ～」構文は、下記のようにブルガリア語においても「私に」という意味の与格代名詞「mi」を用いて表現することが可能である。

日本語：私には この問題が 難しい

ブルガリア語：Tazi zadacha mi e trudna

この問題-名詞句-主格 私には-私に-代名詞1単与格短形 である-動詞3単現在 難しい-形容詞

上記の例から、「私には」は、ブルガリア語の「mi(私に)」に相当し、主格で表されている「この問題」に相当するブルガリア語の「Tazi zadacha」は、日本語と同様に主格で示されていることが分かる。このように、日本語の「経験者(二)ハ～ガ～」構文は、ブルガリア語の与格の「mi」文と対応しているようであり、本研究の出発点も、「経験者(二)ハ～ガ～」構文を「mi」文から考えれば、ブルガリア人の日本語学習者の理解を助けられるのではないだろうかと考えたところにある。

2. 本稿の目的

研究全体の目的としては以下のとおりであるが、本稿では①に絞って論じてみたい。

- ①.日本語の「経験者(二)ハ～ガ～」構文とブルガリア語の「mi」文がどれほど対応するかを調べる。
- ②.ブルガリア人学習者に対して、日本語の自発表現を「mi」文を助けとして解説し、理解を容易にする教授法の可能性を探る。
- ③.日本語とブルガリア語の願望表現について「～ガ～タイ」が「～mi se」文に、「～ヲ～タイ」が「Iskam da～(I want to)」文に対応するかどうかを調べる。

3. ブルガリア語における格

3-1. ブルガリア語における「mi」文

「mi」とは、概略ブルガリア語の一人称代名詞の与格の短形（簡略化した形）で、意味的に日本語の「私に」にほぼ相当すると見てよからう。以下、人称代名詞の与格の短形を「mi」で代表させる。

なお、ブルガリア語の人称代名詞は男性・女性・中性の3種の性を持ち、それぞれの人称代名詞は単数・複数の2種の数変化及び主格・対格・与格の3種の格変化を伴う。更に、そのような代名詞の対格形や与格形には、いわゆる「正式形」とそれに相当する「短形」、つまり簡略化した形、とがあり、両方とも格や人称・性・数により異なる形を持つ。与格に絞って例を挙げると、例えば、

mene	→	mi
代名詞-1 単与格正式形-私に		代名詞-1 単与格短形-私に
nemu	→	mu
代名詞-3 単男与格正式形-彼に		代名詞-3 単男与格短形-彼に
tyam	→	im
代名詞-3 複与格正式形-彼らに		代名詞-3 複与格短形-彼らに

などのように、一人称-単数-正式形「mene」に「mi」という短形が、三人称-単数-男性-正式形「nemu」に「mu」という短形が、三人称-複数-正式形「tyam」に「im」という短形が相当する。

以上のことから、「mi」というのは、厳密に言えば、一人称代名詞の単数形の与格形の短形に当たるのである、ということが分かるが、以前ブルガリア語において存在した不定詞が消失したため、その代わりに動詞の一人称単数形がいわゆる「辞書形」として用いられようになったのもあり、それから「経験者」という意味役割の特性と結び付く内的な状態を表す文は話し手、つまり一人称の視点から述べる方が一般的と思われるため、便宜的に、性や数に関わらず、人称代名詞の与格形の短形をすべて「mi」タイプの代名詞と、またそれを用いた文を「mi」文と仮称することにする。

与格の「mi」タイプの代名詞について具体的に論じるにあたって、まず、その前に、ブルガリア語における「格」というものの特徴や現状について踏まえておく必要がある、先に、それを通時的な視点からごく簡単に見ておきたいと思う。

かつてのブルガリア語において、呼格を含めて言えば、7種の格の存在が認められ、それらは名詞において主として語尾変化によって表示され、代名詞においては、呼格を除いて、それぞれ専用格形が存在していた。

しかし、その長い歴史において、ブルガリア語はいわゆるバルカン語族に属する諸言語に接触しその影響を受ける中で、様々な変化を経てきた。その大きなものの一つとして格関係を表わす形態論的な標識が消失し、格関係がほとんど前置詞または無標の形式によって示されるようになったことが挙げられる。

代名詞においても、以前存在した、それぞれの格に応じた形はほとんど消失し、現代語では、対格と与格においては残存しているが、特に与格代名詞の場合は、変化が更に進んで、その「正式形」は、特別な効果を求める時や慣用句以外の場合にほとんど用いられなくなり、今は対格代

名詞の正式形の前に前置詞を付けて与格関係を示すようになってきた。つまり、(1)は(1')のように、(2)は(2')のように表現されるようになってきたわけである。

(1) Kazah nemu
言う-1 単過去完了 彼に-代名詞 3 単男与格正式形
「(私は) 彼に言った。」

(1') Kazah na nego
言う-1 単過去完了 に-前置詞 彼を-代名詞 3 単男対格正式形

(2) Kazaha mene
言う-1 複過去完了 私に-代名詞 1 単与格正式形
「(彼らは) 私に言った。」

(2') Kazaha na men
言う-1 複過去完了 に-前置詞 私を-代名詞 1 単対格正式形

一方、さきほど「[mi] タイプの代名詞」とした短形は、現在でも広く用いられ、それこそが元来の与格の意味素性を保つものであるため、文中の述語句の項としてのその具現の可能性の有無が、与格関係の存在の証拠となるのが指摘できよう。

以上述べてきたところから、文中に「前置詞+対格代名詞」さえあれば、与格関係が成り立っており、わざわざ「経験者」などのような、意味役割を導入する必要はないように見えるかもしれないが、このことに関してまず留意しておかなければならないことは、ブルガリア語における「与格」というものは、ただ統語的な条件のみによって付与されるものではなく、述語句の自らの意味特徴やその指定する項との意味関係に応じて付与されるのである、ということである。

与格は、多くの言語において述語句で表わされる動作・作用や出来事によって間接的な影響を受けるものを表わす、いわゆる間接目的語と結び付けられる傾向があり、ブルガリア語も例外をなすとは言えず、伝統的に文の統語的構造において通常前置詞「na」（稀ではあるが、「za」、「ot」、「do」の前置詞が用いられることもある）と名詞または対格代名詞の正式形からなる前置詞句として具現される間接目的語と同定されてきた。

ただ、与格関係の有無が、このような統語的な構造のみによって規定されるのであれば、文において間接目的語でありさえすれば、前置詞「na」などの前置詞句はすべて「mi」タイプの代名詞に置き換えることが可能なわけである。

しかし、必ずそうであるとは限らず、間接目的語が必須である三項動詞にもそのような置き換えが不可能な場合がある。例えば、以下の(3)と(4)は、「mi」文への言い換えが不可能である(Петрова2006)。

(3) Tya razchita na men
彼女-代名詞 3 単女主格 信頼する-動詞 3 単現在 に-前置詞 私を-代名詞 1 単対格正式形
「彼女が私を信頼している。」

→ *Tya mi razchita.

(4) Toi poluchi podar' k ot men
彼-代名詞 3 単男主格 もらう-動詞 3 単過去完了 プレゼント-名詞 単男無-対格 から-前置詞 私を-代名詞 1 単対格正式形
「彼が私からプレゼントをもらった。」

→ *Toi mi poluchi podar' k.

「mi」タイプの代名詞との置き換えが可能な場合と不可能な場合とがあるということは、すなわち、文における統語的な関係は、与格関係を認めるための条件として十分ではなく、述語句の意味も大きな影響を与えることを示している。更に、言うまでのことではないが、日本語においても似たような現象が見られ、述語句の項となる名詞句が「二」格で示されていても、必ずしも与格の関係が成り立っているとは限らない（例えば、動詞「話しかける」「かむ」など）。要するに、尤も、述語を中心とする意味役割理論がブルガリア語と日本語のような類型論的に大きく異なる言語の比較対照を容易にするということもあるが、それよりも以上のような特性が、ブルガリア語の与格や日本語の二格を意味役割と連動させるのである。以上のことから、本研究において採用する、意味役割を中心とした研究方法にも一定の妥当性があるのではないと思われる。

本研究において扱う主格・対格・与格などは、文における格関係、すなわち（ある事実や出来事を表す）述語句と（その関与者として具現する）名詞句との関係のあり方の意味で用い、それに対して、代名詞の具体的な現れ方については、それぞれ対格形・与格形など呼ぶことにする。また、ここで扱う「経験者」も、上に軽く触れた「意味役割」としてのもので、それは文中に主格や対格として具現されることはないわけでもないが、一般的に与格と結び付けられ、文中に述語句の項となる名詞句のうち、ある心理的状态または生理的状态を（非意図的に）経験している者、という風に規定される。言い換えれば、文において「経験者」の意味役割を果たす名詞句は、たいてい感情や知覚・思考など、認識に関わる内的な動詞の主体である、と言えよう。

4. 日本語の経験者構文—自発文

日本語において、「経験者」が主体として関与する「経験者（二）ハ～ガ～」構文の典型的な例として「私には故郷のことが偲ばれる」や「私にはどうしてもそう思われた」などのような、「自発」と呼ばれるものが上げられる。自発とは、動詞の主体の意志や可能とは無関係に、またはその意志に反して、自然に、ひとりでに生じる事態であることを表わす表現であり、古語では助動詞「ゆ」「る」「らる」によって表現され、現代語では、自発を表現する助動詞として「れる」「られる」がある。例えば、

(5) 私には故郷のことが偲ばれる

においてのように、もとの動詞「偲ぶ」に助動詞「れる」を付けて、本来主格で示される動詞の経験主体を主格から外し二格で取り上げ、また表わされた事態・状態を誘発する起因となる「故郷のこと」を主格に立てることによって、「故郷のことを偲ぶ」という内的な「動き」が「私」の意志に基づく結果ではなく、自然に起こった、ということを表わすのが、典型的な自発なのである。

日本語の自発は、文献資料から推し量れるところによれば、中古語などの古典語では、現代語に比べ、かなり広い範囲の動詞を対象とされていて生産的に用いられたことが分かるが、現代語では、外的な動作・作用を表わすものとして、感情を伴うという点で心的作用に準ずる「待つ」や「泣ける」「笑える」などのように、可能形と同一の形式においていくつかが残るだけで、現

代語の自発は、「感じる」「思い出す」「想像する」のような知覚・感覚の動詞、「偲ぶ」や「悔やむ」のような感情・心情の動詞、「思う」や「信じる」のような思考・判断の動詞に限られてきた。

こういった「自発」の表現は、これまで様々な視点からその発生や歴史的な発展、またその用法や使用の現状を明らかにしようとする研究が数多くなされてきたが、「自発」に関する定義においてはさほどの相違が見られないものの、その文法的な位置づけやそれに用いられる形態の認定に関しては、なかなか一致した結論に達していない。先行研究を参照したところ、自発を受動態・可能態・使役態と並ぶ単独の態として捉える研究者（北原 1981、寺村 1982、益岡 1987、杉本 1988、安達 1995、山口 2001、岡村 2002、林憲 2003 等）もいれば、それを受身の下位的なカテゴリーとして位置づける研究者（仁田 2009）もおられ、更に「自発可能」（時枝 1950）、「経験者可能」（渋谷勝己 1986）などと呼び、現代語の自発表現を可能表現に引き寄せて扱ってもよいとする見方もあるようである（松下 1930、田口 2001 等）。自発文の形態論的な扱いにおいても様々な立場があり、どこまでを「自発」とするかは、研究者によって異なるところであるが、簡単にまとめてみると、先に「典型的な自発」としてあげた、助動詞「れる・られる」によって表現されるものに絞って自発を考える立場（山田 1936、森山 1988、植田 1998 等）、「抜ける」などのように、語幹に「e-(ru)」という形態素の付いた自動詞（「e-(ru)」形¹）を自発と考える立場（寺村 1982）、「れる・られる」と「e-(ru)」形を共に自発の形態と認める立場（松下 1930、山口 2001）、さらに厳密な形態論的な制約を加えず、「れる・られる」と「e-(ru)」形に、動詞や言い方自体に自発的な意味が認められる場合や、動詞「なる」や副詞が自発的な意味を添える場合などをも含め、かなり広い範囲で自発を捉える立場もあるようである（川崎 1970・1972、日比 2000、岡村 2002 等）。

本研究においては、上述の「思う」「偲ぶ」「感じる」などのような感情・知覚・思考などの心理に関わる動詞に助動詞「れる・られる」の付いたものを「典型的な自発」と呼び、それ以外の、「述語句の主体の意志によらずひとりでにそうなる・自然にその事態が発生する」といった意味を持つ表現には「自発的な意味」を認め、「自発」の周辺的なものとして扱うことにする。なお、「抜ける」、「焼ける」、「割れる」などのような、寺村秀夫が「自発表現」として取り上げている無意志性の自動詞に関しては、自発との意味上のつながりを認めながらも、述語句によって表わされた事態・状態や出来事を引き起こしたり、認識したりする当事者が想定されていないという点で「典型的な自発」と異なり、また、本研究の対象となる「経験者（二）ハ～ガ～」構文を形成しないため、上述の「典型的な自発」に入れず、本研究の対象外として、今回はそれに触れないことにする。なお、その種の動詞は、ブルガリア語においても、動作・作用の主体のコントロールの及ばず、ひとりである現象が起こる・ある状態が生じる意味を表わす場合が多いが、普通「mi」タイプの代名詞が使われることはなく、再帰動詞によって表わされている。

¹ 「e-(ru)」形とは、五段活用をする他動詞の語幹に「e-(ru)」という形態素のついたものが標準の形で、また標準から外れる形に、見える、聞こえる、思われる、泣けるなどが挙げられる（寺村秀夫 1982 による）。

5. ブルガリア語との対応

以上のように、言語研究のレベルにおいても種々の立場がある自発の表現を非母語話者に指導する際には、現場の教師が悩むのも、学習者が混乱するのも、無理はない。

しかし、最初に軽く触れたように、ブルガリア語ではこのような自発文は「mi」文となることが多いようである。例えば、例(5)をブルガリア語に訳してみれば、

(6) 私には故郷のことが偲ばれる

→ Lipsva **mi** rodnoto myasto

偲ばれる-3 単現在 私に-代名詞 1 単与格短形 故郷-名詞句 (形容詞+名詞) 主格
のように、動詞「lipsva」の表わす感情状態を経験している「私」は、日本語の文の場合と同様に「経験者」の項として具現化されて与格代名詞の短形である「mi」で表わされ、またその感情状態の起因となる「rodnoto myasto」は主格で示されている。

「mi」タイプ代名詞を対象とした先行研究はそれほど多くないが、今までなされてきたものによると、「mi」の担う意味役割は *beneficient* (受益者)²と *experiencer* (経験者)のみであるとされている。その二つの意味役割のうち、言うまでもなく、本研究の観点から興味を引くのは「経験者」として立ち現れる「mi」タイプ代名詞である。前述の「経験者」の定義を参照すると、「経験者」は、概略、感情や知覚・思考など、認識に関わる内的な動詞の主体であった、言い換えれば、「mi」文もこのような心的な動詞を用いた文である、ということであるが、それを踏まえて、次にさきほど少し触れた「自発」の特徴と照らし合わせてみると、ブルガリア語における、文中に「経験者」として実現される「mi」タイプの代名詞を用いた文と日本語の「典型的な自発文」との間に関連があると明らかになったと思われる。

しかし、それでも「mi」文は日本語において全てが「典型的な自発」の文に対応するかというと、そうとは限らず、以下の例も示すように、一致しない例もある。

(7) T'zhno **mi** e → (私は) 悲しい。

では、ブルガリア語の「mi」文と日本語の自発文とではどのような対応があるのだろうか。

まだかなり中間報告的なものではあるが、いままで収集してきた用例の分析からすれば、以下のような仮説が得られる。

(8) 少なくとも私にはそう思われる (私言)

→Pone na men taka **mi**

少なくとも-副詞 に-前置詞 私-代名詞 1 単対格正式形 そのように-副詞 私に-代名詞 1 単与格短形
se struva.

思われる-再帰動詞 1 単現在

(9) 従者たちには、その名前が下手な冗談のように聞こえた。(御伽草子「小町草紙」)

² 「beneficient」は、「受益者」の意味であるが、意味役割としての *beneficient* は、多くの研究者が「受益者」の意味役割のみでなく、「非受益者」、「受領者」、「他者の評価・態度・感情などの向かう先」の意味役割をも含めて用いるようである。ここで言う *beneficient* (受益者) もそうであるが/それらを含めた概念であるが、「beneficient (受益者)」という言葉の持つ意味自体がそれらの概念をも含むとは言いがたく、誤解を招来する可能性も高いため、それらの意味役割を全て *Beneficient* (受益者) の意味役割としてまとめることの妥当性を考え直す必要があるのではないと思われる。

→Na pridruzhitelite ot svitata tova ime
に-前置詞 従者たち-名詞句 (名詞+前置詞+名詞) 無標 その名前-名詞句 (近称の指示代名詞+名詞) 主格

im prozvucha kato nepohvatna shega

彼らに-代名詞3 複与格短形 聞こえる-3 単過去完了 のように-前置詞 下手だ-形容詞単 冗談-名詞

(10) 今日は朝から頭が重く感じられる。(作例)

→Dnes ot sutrinta mi tezhi

今日-副詞 から-前置詞 朝-名詞 私に-代名詞1 単与格短形 重く感じる/思い-動詞3 単現在
glavata

頭-名詞完全冠詞付き主格

以上のように、思考・判断・推量などの意を表す認知に関わる動詞や視覚・聴覚に関わる動詞を用いた「mi」文においては、「典型的な自発」との一致の見られる場合が多いようである。なお、「判断する」「推定する」「と見る」「と思う」などのような、知的性格の強い動詞を用いた文には、話者の心の働きを述べるのではなく、話者も含む不特定多数の人々の思考・判断が自然に向かうところを客観的に叙述している場合(いわゆる「受け身の自発と呼ばれるもの」と、思考・判断する主体が話者自身である場合とがある(杉本 1988、植田 1998、林憲 2003 等)。それは、ブルガリア語においても同様であり、前者の場合には、(受身的)再帰動詞が用いられ、後者の場合には、思考・判断が成立する具体的な主体を示すために「mi」タイプの代名詞を入れることとなる。

思考動詞以外の動詞を用いる文においても、

(11) Pritesneno mi e za b'desheteto na detsata → 子どもの将来が思いやられる/案じられる
のように、典型的な自発文と一致するものもあるのであるが、やはりこのような例が少なく対応しない場合のほうが多いようである。

(12) Gadi mi se

吐き気がする-3 単現在 私に-代名詞1 単与格短形 再帰人称代名詞対格短形

→ (私には) 吐き気がする

(13) Zaduha li student vyat'r , dom'chnyava

吹き始める-3 単現在 (～する) と-疑問の小詞 冷たい風-名詞句 (形容詞+名詞) 懐かしくなる-動詞3 単現在

mi za lyatoto

私に-代名詞1 単与格短形 について-前置詞 夏-名詞

→ 冷たい風が吹き始めると、夏が懐かしくなってくる

(14) Tya mi haresa ot

彼女-人称代名詞3 単女主格 私に-代名詞1 単与格短形 好きになる-動詞3 単過去完了 から-前置詞

pr'v pogled

初めての-形容詞 見ること-名詞

→ 私は一目で彼女が好きになった

しかし、これらの「mi」文は、典型的な自発文にならなくとも、「経験者(二)ハ～ガ～」構文となり、さらに意味的にも話し手の意志によらないある心的または生理的状態の発生を表している例が多くみられる。また、例(13)、(14)の日本語対応文において用いられている「～てくる」「～になる」は、受け身や可能の表現と異なり、特に典型的な自発の表現と共起が可能で

あり、また自発的な意味を添える形式としてよく挙げられ（川崎 1970・1972、森山 1988、岡村 2002、林憲 2003 等）、いずれも自発の周辺の表現においても立ち現れるものである。このような自発的な意味ニュアンスは、ブルガリア語においても、接頭語「do-」や「pri-」などによって表わすことができ、また、このようにできた動詞の中でも「mi」タイプの代名詞を必要不可欠とするものが非常に多いため、「mi」文と「自発」との関連について示唆的であると言えよう。

さらに、一般的に自発として認められていないものについても、「mi」文に対応する例がある。以下、いくつかを挙げてく。

- (15) T'zhno **mi** e → (私は) 悲しい。
(16) Yeroglifite sa **mi** trudni → 私には漢字が難しい。
(17) Tova **mi** e neposilno → 私にはこれが無理です。
(18) Tova **mi** e yasno → (私には) それ分かる。

これらには、ブルガリア語においては、味覚・嗅覚・触覚に関わる動詞、また感情の動詞を用いたものが多いが、このような「mi」文に対応する日本語の文は、多くの場合に形容詞や形容動詞を用いたものとなるようである。また、これらの文において、経験者主体が明確に示されていても、「ニ」格では取り上げられないのが普通のものであるが、やはり、主体として「経験者」が関与し、三項述語句として用いられる場合に「経験者（ニ）ハ～ガ～」構文を形成するし、また、意味的にも、あくまでも感覚や感情を表わす以上、主体の意志でコントロールできるようなものと考えがたく、その感覚や感情が生起すると普通に解釈される、といった点で自発の周辺のものとして見ても良いのではないかと考えられる。

更に、

- (19) Utre imam angazhiment i ne **mi** e v'zmozchno da prisystvam → 明日は用事があって出席できません。

のような、日本語で可能表現で表される例もあるのだが、それは自発との近接性が認められている、いわゆる「状況可能」（日比 2000、渋谷 2005 等）であり、また、ブルガリア語においても、「mi」文が主観的な可能・可能性を表わした場合は、ほとんど「状況可能」のみである。

以上、ここであげた例文はほんの一例であるが、さらに多くの「mi」文と自発文の用例を、典型的なものから周辺のものや中間的なものへと、プロトタイプ的に分類し、それらの分析を通じた結果として、対応しているものを抽出し、日本語の「経験者（ニ）ハ～ガ～」構文とブルガリア語の「mi」文の関係を調べて行きたい。

参考文献：

1. 松下大三郎、1930『標準日本口語法』
2. 山田孝雄、1936『日本文法学概論』、宝文館
3. 森重敏、1965『日本文法—主語と述語』、武蔵野書院
4. 峰岸明、1968「自発・可能・受身・尊敬・使役--る・れる・られる・す・さす・しむ・せる・させる(日本語の助動詞の役割(特集))」、国文学 33(12), p16-34,
5. 川崎潔、1970「国語の自発動詞」、『獨協大学学術研究会』 p87-112
6. 川崎潔、1972「国語の自発的表現拾遺」、『獨協大学学術研究会』 p83-108
7. 竹田美喜、1974「「自発」と「可能」の連続・非連続性についての試論」『愛媛国文研究』(24)、愛媛国語国文学会、p63-70
8. 井上和子、1976『変形文法と日本語 下 意味解釈を中心に』、大修館書店
9. 森田良行、1977『基礎日本語: 意味と使い方』、角川書店
10. 寺村秀夫、1982『日本語のシンタクスと意味□』くろしお出版
11. 益岡隆志、1987『命題の文法』くろしお出版
12. 安井稔、1987『英語学概論』開拓社
13. 杉本和之、1988「現代語における「自発」の位相」、『日本語教育』(66)、日本語教育学会、p217-228
14. 森山卓郎、1988『日本語動詞述語文の研究』、明治書院
15. 森山卓郎・渋谷勝己、1988「いわゆる自発について—山形市方言を中心に—」『国語学』152集
16. 渡辺英二、1989「「おのづから然せらるゝ」は"自発"か—「詞通路」自他詞六段図の構造」、『国語国文研究』(83)、北海道大学国語国文学会、p17-30
17. 堀川智也、1992「現代日本語の自発について」、『Language and Culture』22、Hokkaido University
18. 安達太郎、1995「思エルと思ワレル—自発か可能か」、宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法』(上)、くろしお出版
19. 益岡隆志、郡司隆男、仁田義雄、金水敏、1997『岩波講座 言語の科学(5) 文法』、岩波書店
20. 湯原実香、1997「日本語の可能表現に関する一考察--自発・受身との意味的連続性」、『Annals of educational research』43(第2部)、中国四国教育学会、p453-457
21. 植田珠子、1998「「自発」表現の一考察-自発文の二系列-」『日本語教育』96、p109-120、p239-240
22. 田中美和子、1999「原著論文>英語の能格動詞に関する考察: 英語で自発はどう表すのか」『Theses on pedagogic study by postgraduate students at Shiga University』2、Shiga University、p105-114
23. 日比伊奈穂、2000「不随意性と自発--現代日本語の自発として追加すべき用法」『Studies in Japanese language and culture』(10)、大阪外国語大学日本語講座、p105-115
24. 田口聖子、2001「日本語の可能・自発表現と否定形式との意味的關係」『Papers in Language, Literature, and Culture of the Graduate School of Doshisha Women's College of Liberal Arts』(1)、

同志社女子大学大学院文学研究科、 p 35-56

25. 山口明穂・秋本守英編, 2001 『日本語文法大辞典』 明治書院
26. 岡村 裕美、2002 「自発表現をめぐって--思考動詞「思う」を中心に」 『神戸市外国語大学研究科論集』 (5), 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科、 p 15-29
27. 林 憲燦、2003 「受動・可能・自発の連続性について」 『東アジア日本語教育・日本文化研究』 6、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、 p 187-210
28. 渋谷勝己、2005 「日本語可能形式にみる文法化の諸相」、 『日本語の研究』 1(3)
29. 深田 智・仲本康一郎 著、山梨正明 編、2008 『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』 講座 認知言語学のフロンティア
30. 仁田義雄、2009 『日本語の文法カテゴリをめぐって』 ひつじ書房
31. David Dowty, 1991, “Thematic Proto-roles and Argument Selection”, *Language*, Vol. 67, No. 3., pp. 547-619
32. Теодоров-Балан, Александър. 1954, “Българското склонение”. В: БЕ 1954, кн.1,40-61
33. Бъркалова, П. 1997, “Българският синтаксис - познат и непознат. Увод в курса по синтаксис на СБЕ”. Пловдив, Университетско издателство
34. Paducheva, E.V., 1998 Thematic Roles and the quest for semantic invariants of lexical derivation. In: *Folia linguistica* Vol. XXXII/3-4, 349-363.
35. Бояджиев, Т., И. Куцаров, Й. Пенчев. 1999, “Съвременен български език. Енциклопедия”. София, Издателска къща “Петър Берон”, печат Изток Запад
36. Динева 1999: Динева, А. Валентности и семантични роли при изразяването на емоции. В: БЕ 1999/2000, Кн. 2, 1-25.
37. Джонова, М. 2003, “Изречения със семантичната роля експеренциер в съвременния български език” Докторска дисертация, София
38. Петрова, Г. 2006, “Семантични роли на кратките дателни местоимения”, Димант
39. Петрова, Г., 2006, "За залоговата диатеза", Годишник на Университет "Проф. д-р Асен Златаров", т. XXXV (2), Бургас
40. Ницолова, Р. 2008, “Българска граматика. Морфология”. Университетско издателство “Св. Климент Охридски”